愚考考古学（一七）

「元」にはどんな意味があるか

中林幸夫
（会員・佐伯市長島町）

平成四年四月、過疎の蒲江町元猿に、県南では一番大きな建造物として、マリンカルチャーセンターがオープンし、海に関心を持つ人々が訪れている。

この「元猿」という地名の「元」であるが県南の地図を開くと、

元　猿
元山（今の地図では元猿山、海図等は元山）
元ノ鼻
元　越
元越山
元ノ間（鶴見崎と大島間の海峡）

など、「元」の字のつく地名が点在している。

この「元」のつく地名を地図で見ていると昔「元」と呼ばれる頭（かしら）か支配者がいて、人々が「元」の呼び名を上につけて、「元ノ山」「元ノ間」「元へ越す山」等と呼んでいたのが地名になったように思われてならない。

それでは「元猿は？」ということになるといろいろな推理が出来る。

「猿」についての推理の一つは、天孫降臨の神話の中に出てくる「猿田彦命（サルタヒコノミコト）の猿の呼び名と動物の猿である猿田彦命は、天孫降臨の中で案内をつとめた神ということになっている。

『日本書紀』によれば、猿田彦命はニニギノミコト降臨の際、天の八衢（ヤチハタ）にいて邪眠を以って神々を恐れさせたが、アメノウズメノミコト（女神）に制せられ、天孫の先頭に立ち、後、伊勢国五十鈴川上に鎮座したとのことで、容貌魁偉で鼻長七咫、身丈七尺余と書かれている。もし、猿田彦命だと仮定すれば、元猿は頭の猿田彦命が住んでいた里ではなかったろうか。

次に、「元山」「元ノ間」について考えると、古代の海上交通路の要所であり、県南地方は、猿田彦命の支配地であったのではないだろうか。「古事記」等の神武東遷

は信じたくはないが、県南地方が海上交通路の要所であったことは疑う余地はない。それと、神武天皇の寄港地とされる蒲江町畑野浦の伊勢本神社の「本」もなにか「元」との関係がありそうに思えてならない。それは、猿田彦命がのち伊勢国に鎮座したとの記録があるからである。

二つ目に考えられることは、「猿（サル）」は「里（サト）」の訛とも思われるが、「米」「稲」のことではなかろうか。汐月三代吉氏の著書『青山史考』を読んでみると、各地域の道祖神のことが詳しく記録されており、元越山の麓のものは、猿田彦命となっている。

青山地区庚申塔（猿田彦）

一般に道祖神の石碑や石塔は、「庚申塔」「不動明」等が刻まれているものが多いが、青山に行って石碑を見ると、「猿田彦」と刻まれているものが多く、何故か、石碑の猿田彦の文字が威厳とほお笑みをもっていて、無言の中に、「我はご先祖様だ」といっているように感じさせる。

社の中に祭られた神ではなく、田の畔にあるのがいい。

青山地区の六基の猿田彦の石碑が並ぶ丘に登って見回すと、山間（やまあい）の田畑の稲穂が黄金色に輝き、彼岸花が豊作の喜びを語っているようである。

そこで、「猿」が「米」ではないかと思えることは、朝鮮語では「米（ウルチ米）」はサル（쌀）であり、現在はシャリと訛り、寿司屋では、ご飯のことをシャリと呼んでいること等から、元猿は、元の稲田（陸稲）があった所かもしれない。今では、「田」「畑」「畠」の文字が使われているが、文字のない時代には、

野菜等を作る　ハタ（葉田）
米を作る　　サルタ（米田）

と、古代人は区別していたかもしれない。

朝鮮語では、「海」をパタ（바다）と呼んでおり、「タ」は広いものを意味していたのかもしれない。愚考を重ねると、猿田彦は、この地方に初めて稲作を伝えた先住民族と思えてならない。だから、渡来人の天孫族の出現時

の案内役として『古事記』等に登場しているのではなかろうか。

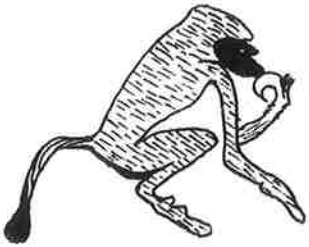
本稿を書くにあたり、「元」に関係がありそうな書物を調べた中に『元田の歴史』市野瀬善之著（原稿は市野瀬　仁氏が作成）があり、これによっても「元」の支配下に関係ありとすべきかなどで迷い、結論は出せなかった。郷土誌は、必ず発想の原点が地域の何処かに結び付くと、私は思っている。笹川良一氏ではないが、「世界は一つ」。みんな家族かもしれない。

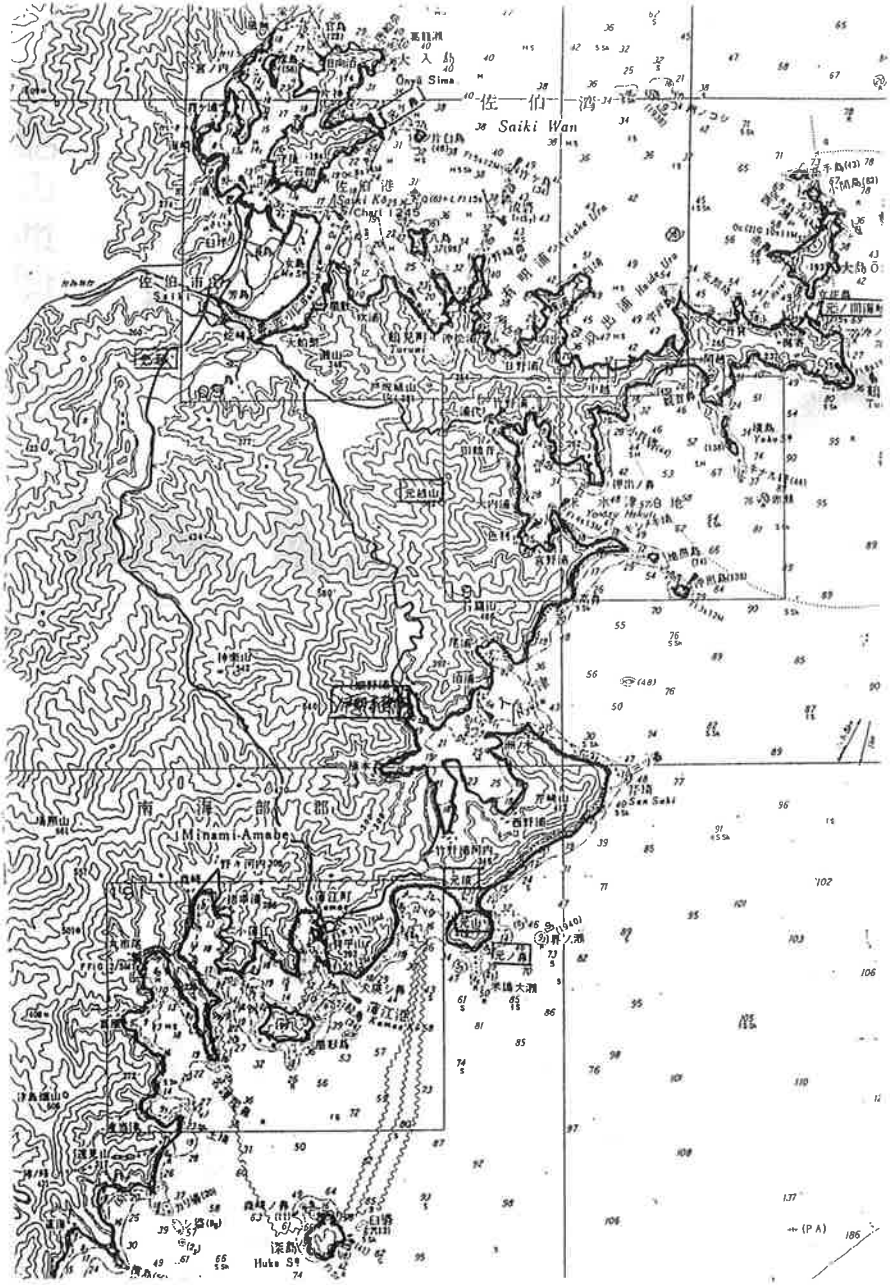
多分、古代人は元猿の海岸に寄せ来る大波に、水平線の向こうに何があるかを尋ねたことであろう。現代人が宇宙の果ての未知なるものを求めているように……。

そのために、古代人は、未知からの渡来人に従順だったのだろう。

今、アメリカ大陸発見のコロンブスは裁かれようとしている。先住民族の問題は強者によって抹殺されてきた。この地方の先住民族は猿田彦族であると信じている。

豊作の稲穂の中の道祖神




大入島
Onyu Sima
佐伯湾
Saiki Wan
佐伯港
Saiki Kō
佐伯市
Saiki
元越山
南海部郡
Minami-Amabe-gun
Minami-Amabe
Huke Sima